

大空を飛びたい

高野敦志

目次

大空を飛びたい

来む世には虫に鳥にも我はなりなむ（大伴旅人）

イカロスのように大空を飛びたい。定時制高校を中退した僕は、家を飛び出して道路工事や、ビルの建設現場など、職を転々としていた。ようやく居着いたのは、新聞の販売所だった。そこには僕と同じように、干渉されるのが厭な連中がたむろしていた。鬱屈した日々の間も、幼い頃からの夢は育み続けていた。小型飛行機を操縦したり、気球に乗ったりするのは、ハードルが高すぎる。初心者が空を飛ぶ方法のうち、パラグライダーなら、僕のような人間でも可能だと思った。

三月の初めの日曜日、朝刊の配達を終えると、そのまま下田

行きの普通列車に乗った。河津駅に着くと、パラグライダー・スクールのライトバンが止まっていた。中には予約した学生らしい男女が乗っていた。早春でまだ風は冷たかったが、まっ青な空には雲一つなかった。川沿いを進んでいくと、花びらが濃い河津桜が満開になっていた。二十分ほど山中を揺られていくと、新芽の出ていない斜面の上の方に、白い平屋の建物が見えてきた。

今回集まったのは、一日体験コースの参加者十名で、自家用車でやって来た人もいた。午前中はパラグライダーに関する講義が中心だった。パラシュートのような部分がキャノピーで、前面に並んだ筒に空気が流れて浮上するとか、キャノピーの後縁から延びるラインを束ね、グリップをつけたのがブレークコ

ードだとか。それを引くことでカーブしたり、ブレーキがかかったりするらしい。とにかく覚えなければいけないことが多かった。実演のビデオを見てから、いよいよ体験する段階となった。

まず、飛行するための予備訓練に入る。指導員の笛でゆるい斜面を駆け下りていく。本番で足がすくんでしまったら、斜面を転がり落ちて、蜘蛛に囚われた芋虫のように、草むらに突っ込んでいくことになる。飛行を終えるときは、ブレークコードを引いて高度を下げる。着地する際には、足への衝撃を和らげるために、草地を駆け抜けるようにする。一連の流れを体で覚えたら、次に、キャノピーを草地に広げていく。ラインがからまないようにして。僕は人に指示されるのが好きではない。ただ、ここではそんなことは言っていられない。人の命がかかっているから、皆の表情にも緊張が走る。

午前中はそこまでで昼食。午後から本番となる。最初はゆるい斜面を駆け下りていき、着地までの流れを確認する。その後、実際にパラグライダーを背負って、十メートルの高さから飛んでみることになった。指導員が風の流れを見て、十分な向かい風と認めたとき、旗を振ってくれるのだが、風が強すぎると、キャノピーに引っ張られて、まっすぐ立っていられない。

いよいよとなると、足がすくんでしまった。とても飛び立てるような状況ではない。しかも、ブレークコードを引くタイミングがずれたから、飛び立てないまま、斜面を駆け抜けるだけで終わった。僕は気が滅入ってしまった。年下の女の子たちが、

軽やかに飛び立っていくのに、自分だけは地面を這う芋虫のままなのだから。

　数度のチャレンジを経て、地面すれすれのところを滑空したが、空を飛んだという実感はない。その日、最後のフライトは、六十メートルの高さから飛行するというものだった。畳んだパラグライダーを背負って、斜面の一番上まで登っていく。他の若者はすでに上手に飛んでいるので、余裕の笑顔さえ浮かべていた。

　前の女の子が飛び立った。笛の音が鳴った。断崖のような高さにいる自分を感じた。足もとを見てはいけない。視線を上げると、かすんだ沖合では伊豆大島の三原山が、雲海から頂を突き出していた。

　海側から吹き上げる風で、キャノピーが立ち上がった。大きな翼が頭上に広がっていく。僕は覚悟を決めた。

「死んでもいい！」

　死を恐れるから、刀で斬られるのだ。死さえ恐れなければ、人間は本来許されているはずの、完全な自由を享受できるのだ。僕は駆けだした。滑走路を進む飛行機のように。指導員の「行け！」という声が聞こえた。

　ブレークコードを引くと、斜面から足が離れるのを感じた。吹き上げてきた風で、僕の体は重力に逆らって、すうっと持ち上げられていく。地上に縛りつけられた桎梏（しっこく）から、ようやく逃れたのだ。鳥の感覚というのが分かってきた。空中を飛行する姿勢こそが、自分であるということが。

はるか下には、着陸の目標を示す円が見えていた。そこに向かって、一方のブレークコードを引いて、カーブしていけばいいのだが、一分足らずの飛行では満足がいかなかった。僕は上昇気流を探りながら、午前中に上ってきた林の方へ飛んでいった。河津川に沿って咲き乱れる桜が、風を受けて花びらを散らしていくのが見えた。

太陽がほほ笑んでいた。限界を超えるのだ！　何者にも縛られない自由に向かって。気がつくと、僕は三原山を目指して、白波の立つ海の上を飛んでいた。パラグライダーを操作する感覚は、すでに体からなくなっていた。速く飛んでいきたければ、翼を羽ばたかせればいい。風を切りたければ、翼を左右に広げて滑空していけばいい。地上に這いつくばることに愛想を尽か

した僕は、カモメとなって他の海鳥と鳴き交わしながら、彼方の島に向かって飛び続けていた。その時までの人間の肉体が、地上のどこかに横たわっているかなど、気に懸けることもなく。

あとがき

まだ三十歳になったばかりの頃、初めてパラグライダーに挑戦した。友人の話を聞いて、自分もやってみたくなったからである。伊豆急行の河津駅で待ち合わせ、パラグライダーの一日体験コースを受講した。午前中に講義を聞いて、昼過ぎには実際に空を飛んだ。その時の印象があまりにも鮮烈だったので、素材にして空想的な物語を書いてみることにした。それが今お読みになった「大空を飛びたい」である。

高野敦志

二〇二三年二月二十三日